

府亦洩達資頼給官并内舍人事等、示御返事云、資頼事承之隨使身内舍人事早可出申文者、故殿關白時、准攝政大臣可見官奏事、又々可聞案内者、大略申了、秉燭後、資平來曰、准攝政之宣旨、明日可被下也、大納言公任候左府、即可奉下之由、被命此卿、略中准攝政例見官奏事、可行除目事、可行一上事等、明日可被下仰也、是相府詞也、無御惱問詞、又有被仰之類歟、亦無相違歟、今日主上被仰云、我可避位、然而忽不思之、仍讓務於左大臣、若所行有非、必當天譴歟、是能所思得、還爲彼不祥歟、爲我息災也者、春宮大夫齊信云、奉爲主上、當時後代之無極耻辱者、侍從中納言行成云、春宮御代、可爲攝籙臣、而俄有斯事、不可被過今年歟、甚愚也、

〔大日本史贊藪一〕三條天皇紀贊

贊曰、自攝政良房居外祖之重、攝籙之家、莫不欲生女爲后妃、以微幸宰衡之任也、既進女而爲女御、由女御而冊中宮、錮寵掄愛、一生皇子、而不擇長幼、不顧明闇、扳而立之、其意若曰、是我家所生也、是我家所立也、太阿之柄、移於外戚、歷世三公、宗族盤互、勢禁威懾、筭執樞機、而其間不能無梁冀之跋扈、揚駿之專愎、雖有英明之主、終莫能如之何、此非一朝一夕之故、席雖默禱求佑、果何所益哉、

〔大鏡三左大臣師尹〕このたびの東宮には、式部卿の宮一一條皇をどこそは思しめすべけれ、一條院

のはかばかしき御後見なければ、東宮に當代を立て奉るなりとおほせられしかば、これもおなじ事なりと思し定めて、寛仁元年丁巳八月九日こそは九歳にて、三宮後東宮に立たせ給ひて、同月の廿三日にこそは、壺切といふ大刀は内よりもて参りしか、當帝位に即かせ給ひしかば、すなはち東宮にも参るべかりしを、まかるべきにやありけむ、とかくさはりて、この年比内のをさめ殿に候ひつるぞかし、略中故三條院度々申させ給ひしかども、とかく申しやりて、奉らせざりしとこそ聞き侍りしか、されば故院もさむばれ、なくとも立てではとておはしまし、なり、

〔左經記〕寛仁元年八月廿三日戊子、今朝御物忌也、申二剋被渡壺切御劔於東宮、後朱雀、件御劔、須御讓位、日被渡、東宮前